

熱帯アジアは水不足

熱帯アジアを旅したことのある人なら、湿気と暑さに閉口した経験をお持ちだろう。とにかく蒸し暑く、ちょっと動くだけで汗が噴き出す。祇園祭りのころの京の天気を思い出してみればよい。湿気の風土だから、なにはなくとも水だけは十分にある。コメもとれるし魚もいる。水の入手に困るなどとはだれも思わない。

ところがそんな熱帯アジアで意外と手に入りにくいのが水、それも飲み水などの「きれいな水」だ。

今でこそ、よほどの田舎でない限り市販のペットボトルが流通しているものの、数年前までは安全な飲み水を手に入れるのが大変だった。田舎を旅する時には、朝でがけに、持参の水筒に熱湯をいっぱいもらう。移動中のどが乾けばそれを飲む。暑い時に熱いものを飲むのだから体温は余計に上がって汗が噴き出す。水道水ぐらいあるではないかといわれるかもしれないが、水道水を飲んで腹をこわした例はいくらかもある。氷もまた、当然のことながら禁物。暑い時の氷ほど魅力的に見えるものはないが、そこをぐっと我慢する自制心がないと熱帯の旅行はままならない。

汗をかいたあとはシャワーでも浴びて冷たいビールでも飲みたいところだ。ところがそのシャワーの水さえままならないことが多い。川ではチョコレート色の水の中で子どもたちが水遊びに興じているのだが、まさかそのまねをするわけにもいかない。免疫のない私たちがそんなことをしようものなら、数日後には病院送りになることうけあいだ。結局熱帯アジアは、あれだけ水がありながら、きれいな水が手に入らない妙な土地である。

雨期と乾期のあるところでは、水の事情はさらに悪くなる。乾期には、気温は十分高いというのに木々はその葉を落とす。川は枯れ、ため池は干上がり、道には土ぼこりがもうもうと立ち上がり、路傍の草たちは土ぼこりにまみれて褐色に変色している。水などどこにもない。そんなところに限って、雨期ともなると道はぬかるみ歩くことさえままならないが、そうはいつでもきれいな水はどこにもない。雨期も乾期も、きれいな水がないという点では変わらない。

そうしてみると、水があることとそれを使えることとは大きく違うことに気がつく。蛇口をひねればいくらでも水が手に入るなど、日本ならではのことだ。日本はきれいな水が昔から手に入る、希有の土地である。山には森が残され、森に蓄えられ浄化された水が、時には地下水となってたくわえられている。

京の地下にも巨大な水がめがあるという。その水が、鮮魚をはじめとする生食の文化や、麩、豆腐など、大量の水を要するさまざまな食文化を成立させたのである。

佐藤洋一郎、現代のことば（京都新聞 2006・12・25）